

専門学校を卒業後、実家の片隅にあったプレハブで音楽教室を開講しました。すぐに生徒が集まるわけもなく、レッスン時間とかぶらない隙間時間でほかの仕事ができないかと、求人広告を見ていた時に出合ったのが「セレモニープレーヤー(葬儀で演奏する奏者)」でした。当時は、音楽関係者もほとんど知らない仕事でしたが、演奏の仕事ができるならいいかなと安易な気持ちで始めました。

葬儀は突然です。プライダルのように何カ月も前から曲が決まっていたり、チャペル奏者のように毎回同じ曲を演奏したりするわけではありませんが、故人さまが好きだった曲や遺族が故人さまへ贈りたい曲、そのようになりクエストが確定するのは早くても葬儀の二日前です。当日演奏している最中にリクエストされる場合もあります。祝いの場なら笑って許されるミスも葬儀という厳粛な場では許されず、

## 民報 サロン

とても身が引き締まります。古い歌謡曲など当時は初めて演奏する曲ばかりだったので、極度の緊張から一つの式が終わるたび全てのエネルギーを吸い取られた気分でした。今では特番で放送される名曲百曲全てが分かります(笑)。

この仕事は毎回違うドラマが存在し

### 未知の仕事へ

ます。一つとして同じ式がない中で、私が一番印象に残った式を紹介しましょう。事前にリクエストをいただいていたなかったため、故人さまの年齢、性別、季節などを考慮して選曲していきますが、遺族の方に話を聞くと演歌が大好きだったとのことでした。歌手を三人あげられたので、準備していた楽譜

を総入れ替えして演奏しました。中でも大泉逸郎さんの「孫」は、初孫を抱いてよく歌っていたとお聞きしたので献妻の一曲として演奏しました。

会葬者が落ち着いたころ、「急なりクエストに心えてくれてありがとうございます」と、遺族や親族の方が次々に話しかけてきてくれ、弾いた曲と故



鈴木 恵

人とは山あり谷あり。それぞれに歩んできた道があり、その最期に行われるのがお葬式です。一つの尊い命が消える。その事実を受け止め、残された方が前へ進んでいくための大切な儀式。そこに、故人さまの人生を尊重し寄り添う音楽で包み込む仕事、セレモニー演奏です。安易に始めた仕事か人生の一部になるまで時間ばかりありませんでした。これからも初心を忘れず、故人の人生最期のステージを最高の形で送り出せるよう、スタッフ一同研さんに励んでいきます。(いわき市石塚町、エモーション代表)

人さまの思い出話を聞かせてくれました。皆さんに愛されていたおじいさまだったのだと思いました。その後の出棺時、「大好きでしたおじいさまへ、お孫さまから贈ります曲 いきものがかりの『ありがとう』」とナレーションが入り、ストリングスの音色が式場に響き渡ると、参列者一同涙に包ま